

ポスターで綴る50年

結成大会に始まり、闘争、政策に関する金属労協の意思を伝え続けてきたポスター。時代を映し出す鏡でもある。50年間の主なポスターから金属労協の活動を振り返る。

1960年代



1970年代



1980年代



1990年代



2000年代



◆1964年から半世紀、金属労協は50周年を迎えた。当時、4つのナショナルセンターに分裂していた金属労組をひとつにまとめるという発想の転換は、金属労協を誕生させ、そして連合の結成にも繋がった。また、現在につながる様々な活動の多くが結成数年の間に始められた。なんと大胆なそして先見の明をもった発想だろう。

◆最近「どこへ向かうべきか見誤らないためにも、どこから来たのか(創業の精神)を忘れないことである」という趣旨の文章に出会った。今、ここに金属労協が存在しているのも、諸先輩方の努力があったからこそである。金属労協の原点を忘れずに、これからも日々活動していきたい。(智)

AUTUMN issue [秋号]

発行所 ● JCM (金属労協)
東京都中央区日本橋 2-15-10 宝明治安田ビル 4F
TEL.03-3274-2461 FAX.03-3274-2476

発行 ● 2014年9月1日(年2回) No.308
編集 ● JCM組織総務局
印刷所 ● 太平印刷(株)



ものづくりは人づくり、50周年を機に新たな発展を

巻頭言



JCM 事務局長
若松英幸

真実のほどは不明だが、昔「イチゴとミツバチの話」を聞いたことがある。養蜂業者は花を求めて、日本列島を南から北に移動するが、イチゴのハウスに入れられたミツバチは花の蜜が少ないため、働き過ぎで寿命が短いというのである。この話を経営者に例えて、蜜の多いレンゲや菜の花の畑に労働者を誘導しないから、暮らしが豊かにならないのだ、というのが話のオチである。

先日、ものづくりの中小企業が集積する新潟県・燕三条市にある小林工業を訪問した。「LUCKYWOOD」ブランドのナイフやフォークなどを製造している小林工業の小林社長に、現場の案内と製品の説明をしていただいた。失われた20年といわれ、企業がこぞって海外進出していった時代に、国産にこだわり、主力の2,000円位の商品から、ホームセンターで販売する200円の製品に幅を広げて、厳しい時代を生き抜き、雇用を維持してきた。ナイフやスプーンの品質や使い心地、洗浄・防菌効果の違いなど、2時間にわたり説明を受けたが、普段何気なく使っている製品にも、日本のモノづくりの心、品質が根付いていることに、改めて感心した。北九州市に本社を置く松本工業の松本社長は、同じように地域で雇用を維持・拡大しているが、「成功の反対は失敗ではなく、何もしない事」と言っている。経営者の資質で、会社の業績が大きく振れる例は、枚挙にいとまがない。ましてや、中堅・中小企業の場合は、雇用に与える影響は甚大である。

失われた20年、世界における日本経済の存在感は大きく低下した。しかし、国際会議などに出席すると、日本人に対する信頼は未だに強いことを実感する。加えて、想像以上に親日国が多いことにも驚く。明治23年9月、トルコ海軍のエルトゥールル号が和歌山県・串本町大島の沖で遭難した際、約650名もの遭難者を昼夜兼行で救助し、丁寧に弔い、多くの日本国民の募金も得て、トルコまで送り届けた話は「海の翼」秋月達郎著に詳しい。また、終戦直後の昭和21年1月、新潟県・佐渡島の浜辺に不時着した、イギリス軍機「ダコタ」の乗員に近寄りたとしてもいない住民に対し、「ここには昔から天子様や流人など幾多の人が漂着したが、先祖は分け隔てなくそれらの人々を救ってきたではないか」という村長の一言で、皆で厚くもてなし、浜辺に重い石を敷き詰めて滑走路を造り、無事に飛び立たせた話もある。さらに、明治時代にベトナム独立運動家、ファン・ボイ・チャウが日本に亡命してきたとき、私財を投げ打って支援した浅羽佐喜太郎医師(静岡県・袋井市の常林寺に記念碑あり)の話、東日本大震災でドイツ人のシュピールベルク一家を救助し、仙台から新潟、東京を経由して本国へ返した日本人の救助リレーの話など、

心の交流を語る話は数多い。しかし、海外では恩を受けた話が孫子の代までも伝わっているのに、残念ながら、日本ではほとんど伝承されていない。

日本人の持つ真面目さ、ひたむきさは、創意工夫へとつながり、ものづくりの現場ではチーム力、現場力としてその強さを発揮する。経済の好転へ潮目が変わろうとしている今、日本のものでつくりの進路を、アメリカ型の強い産業・事業に特化するのか、ドイツ型のマイスター制度やデュアルシステムなど、人づくり・政策誘導型とするのか、日本人の特質を生かした方向を明示する必要がある。企業の存続や雇用の維持・創出のためには、経営者の資質と相まって、働く「人」の資質の高さが欠かせない。金属労協は、現場力、産業力の強化のためには、長期安定雇用と「人」への投資が重要とし、強い金属産業が生む安定した良質な雇用創出を政策の柱にしてきた。第53回定期大会では、経済特区をはじめとする地方活性化も含め、あらゆる資源を投入して「攻め」の政策を実現すべく、運動方針を提起する。ものづくりで人類に貢献する産業、若者が夢を持てるような産業を目指して。



写真上: 創意工夫と日本品質で厳しい時代を生き抜いてきた小林工業の現場。
写真下: 「人」への投資を求めたJCM共闘の集回答日(2014年3月12日)



運動の姿勢は「目は高く、頭は低く、心は広く、感情は豊かに」である。